早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　24号―1　二〇一六年九月

『平家花揃』の成立過程についての考察

藤田　加世子

はじめに

本稿では、『平家花揃』の成立過程についての考察を行う。『平家花揃』とは、『平家物語』の平氏方の登場人物を花や風景に喩え、和歌を付して論評した作品である。以下に例を挙げる。

新中納言とも盛

みめよりはしめて気色なかばからゆふによき人とおぼゆ。中宮の御はらからと申たるに、露あかぬ事なくめやすくこそ見え給ふ。それ神な月朔日ころ、ふりみふらすみうちしくれたるくもまより、夕日かけとき〳〵もりいて、、いろ〳〵にこくうすきもみちの、まことににしきをひわたせるやうなるに、かせすこしふきいて、、したはかつちる程にそおもひよそへ給ふ。

滝田姫おるや木末のから錦しく物もなく見ゆる色哉[1]

また、後述するが、和歌が付されていなかったり、論評されず、花のみ記されていたりする人物も少なくない。

大夫あつもり

またとしわかきふゆ梅のつほみひらくるよそほひを、はつかに見つけたるこゝちしたまふ。わかうをかしくあてやかなるさましたまひて、上らうしくやさしき人の、さるは心もかうにあはれなりしありさまなり。

たか房の北方

しらんの花

本作品は諸本間で形態が大きく異なることが特徴的である。特に、系図形式で書かれているか否かという点で大きく異なる。現在では御伽草子に分類されることが多いが[2]、現存諸本は系図形式で書かれたも

のが大半を占めており、『平家物語』の系図、すなわち注釈の一つとして享受された側面も見受けられる。

先行研究においては、『平家花揃』の本文異同や、人物の配列、『平家物語』との関係についての考察が行われている一方で、形態的特徴そのものに焦点を当てたものは少ない。異なる形式の伝本の先後関係について考察した渥美かをる氏の研究は、主に本文や人物の配列順からの考察であること、また現存諸本全てを考察対象としていないことなどから、未だ考察の余地が残されている。[3] その後、松尾葦江氏によって現存諸本の紹介・校異がなされたが、形態の違いといった観点からの考察はなされていない。[4] 一方、吉崎奈々氏は、系図の形態そのものに着目し成立年代を推察しているが、これも『平家花揃』の一部の伝本についてのみの考察であり、また成立年代の推定方法についても疑問が残る。[5]

そこで、『平家花揃』について、書誌的あるいは叙述の形態面から考察を行った上で、物語系図としての位置づけを試み、さらに成立過程について考察する。この考察は、『平家物語』享受、注釈の様相を考える上での手がかりとなると考えられる。

一　『平家花揃』現存諸本の形態上の特徴

『平家花揃』の構成は、①目録、②花揃部、③武士名部の三つに分けられる。[6] うち、②は（一）清盛一門と（二）平家周辺の貴族・女房によって構成される。この（一）の部分が系図形式になっている諸本を、ここでは「系図系諸本」、または「系図形式」の伝本と呼ぶこととする。系図系諸本は①の有無によってさらに二つに分類することができる。この①は、系図系諸本の一部の伝本にしか存在しない。これは『平家物語』十二巻の章段名が記されている。対して、（一）が系図形式でない諸本を、一括して「非系図系諸本」と称する。このうち散文体の伝本を「草子形式」、挿絵入りの伝本を「絵本形式」と称する。[7] なお、非系図系諸本は③の部分を持たない。

そこで、『平家花揃』の現存諸本十二本[8]について、Ⅰ系図系諸本目録アリ・Ⅰ系図系諸本目録ナシ・Ⅱ非系図系諸本草子形式・Ⅱ非系図系諸本絵本形式、と形式の違いにより四つに分類したのが、次頁に挙げた表一である。

前述した通り、形態について論じた先行研究は吉崎奈々氏のもののみであった。しかしそれは、成立年代の特定という目的のもと、神宮本『源氏物語系図』と『源氏物語巨細』の系図の引き方が表のD・Ⅰ（内閣本・神宮本）に類似しているということが述べられるにとどまる。つまり、『平家花揃』現存諸本そのものの形態についての考察は未だなされていないのである。

では、現存諸本の形態上の特徴を挙げていく。まず言えるのは、系図形式の伝本が多いということである。現存諸本の形式の内訳は、十二本中系図形式のものが九本（A～Ⅰ）、草子形式のものが二本（J・K）、絵本形式のものが一本（L）である。

次に、題の異同が大きいという点が指摘できる。後藤丹治氏[9]や松尾

表一　『平家花揃』現存諸本一覧

	Ⅰ系図系諸本								Ⅱ非系図系諸本		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
	慶大本（慶應義塾大学図書館蔵）	山岸本（実践女子大学図書館山岸文庫蔵）	彰考館本（彰考館蔵）	内閣本（国立公文書館内閣文庫蔵 旭岱子編『墨海山筆』別集八所収）	国文研本（国文学研究資料館蔵〔書名なし〕所収）	関大岩崎本（関西大学図書館岩崎美隆文庫蔵 岩崎美隆編『藤門雑記』第二第卅冊所収）	東大史料本（東京大学史料編纂所蔵和田英松氏旧蔵）	刈谷本（刈谷市立中央図書館村上文庫蔵 村上忠順編『蓬廬雑鈔』二五所収）	神宮本（神宮文庫蔵）	蓬左本（名古屋市蓬左文庫蔵）	穎原本（京都大学文学研究科図書館穎原文庫蔵 穎原退蔵氏旧蔵）	貞享三年版（学習院大学日本語日本文学科蔵）
形式	系図	系図	系図	系図	系図	系図	系図	系図	系図	草子	草子	絵本
目録	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
武士名部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
外題	「平／家／花そろへ」	「花盡平系圖」	「平家物語系圖」	—	—	—	「平家人物論」	—	「平家人物論」	「平家花揃」	「平家花揃」	「平家物語」
目録題	「花つくし」	「花つくし」	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—
首題	×	×	×	「平家人物論」	「平家人物論」	「平家人物論」	×	「花玖良倍」	×	「平家花揃」	「平家花揃」	×
その他題	—	—	—	—	—	目録には「平家しなさためめ」として「平家公達巻詞」とセットになっている。	—	—	—	—	—	柱題「平花」刊記「君達花そろへ」
奥書	×	×	延宝六年書写	西田直養（天保十四年）↓梅処閑人（嘉永五年）	西田直養（天保十四年）↓梅処閑人（嘉永五年）	西田直養（天保十四年）↓岩崎美隆（天保十五年）	×	青木信寅蔵本書写（村上忠順）（明治十三年）	×	×	神戸良政加注奥書（寛永十九年）	貞享三年刊記

＊ＢＥＦは先行研究で言及なし。

氏が、その題をもって諸本を『平家花揃』系と『平家人物論』系とに分けていたように、題と形式は対応していると考えられる。より細かく見ると、非系図系・系図系諸本共に「花」が内題に付く伝本がある一方で、「平家人物論」という題をもつ非系図系諸本がないということが分かる。

外題は後補の可能性があるため、ひとまず内題のみを対象とする。内題に「花」が付く伝本として、まず「平家花揃」の題を持つJ・Kが挙げられる。なお、L貞享三年版については、柱題が「平花」であること、名古屋市立鶴舞図書館河村文庫の目録（『河邨秀根蔵書目録』）に「平家花そろへ」とあることなどから、Lの書名は「平家花そろへ」、少なくとも、「花」が付く書名であったと考えられる。したがって、Lもここに含めることが出来る。他に、「花つくし」がA・B、「花くらべ」がHである。すなわち、内題に「花」が付く伝本六本の内訳は、非系図系、系図系諸本それぞれ三本ずつとなっている。これに対し、「平家人物論」という内題を持つ諸本はD・E・Fと、全て系図形式の伝本である。さらに外題に範囲を広げても、系図系諸本であるG・Iが該当することが分かる。

「花」のつく題をもつものは、平氏方の人物を花に喩えるという内容の特質を表す題であると言えるのに対し、「平家人物論」という題は物語注釈としての特質を表す題であると言える。このような二つの形態あるいは題の存在から、『平家花揃』には、平家の人物を花に喩えるということ自体を楽しむという享受と、注釈として利用するという享受と、二つの享受のあり方があったのではないかと想定されるが、それについては成立の特質と絡めて後述する。

そして、本文の構成からは、目録をもつものと持たないもの、武士名部をもつものともたないものがあるということが指摘できる。その内訳を見ると、目録があるものはA・B・Cという系図形式の一部に限られる。一方、武士名部は系図形式の伝本全てに付されているが、逆に、系図形式でないJ・K・Lには武士名部が付されていないことが分かる。つまり、系図という形式と、一見余計なものに見える武士名部には、強い結びつきがあるということが示されていると言える。

この武士名部と系図との関係については、『源氏物語系図』や『狭衣系図』といった物語系図の形式と共通性があると考えられる。これについても後述する。

二　物語系図としての『平家花揃』

物語系図とは「系図形式によって表された物語の登場人物に関する注釈」と定義づけられる。登場人物の血縁関係等を視覚的に表すことによって、さらには付された注記によって物語の理解を促すのである。

ではここで、系図系『平家花揃』を物語系図として捉えると、どのような性質があると言えるのかを明らかにするために、まず、物語系図として代表的なものである「源氏物語系図」と比較する。さらに、『平家物語』についての物語系図としての性質を有する、宮内庁書陵

部蔵『平家物語系図』を取り上げる。[10]

まず源氏物語系図は、物語系図の中でも群を抜く伝本数を誇り、物語系図の代表的存在といっても過言では無いだろう。現存最古とみなされる九条家本の成立は鎌倉初期までさかのぼることができる。

源氏物語系図は、三条西実隆が長享二年に作成する以前の系図を古系図、それ以降のものを新系図に分類して考えるのが一般的である。古系図は伝本ごとに異同が激しく、系図以外に様々な付載事項を増補している。それを整理したのが実隆であり、今日最も多く伝本が存在する源氏物語系図はこの系統のものであるという。版本の源氏物語に付載された系図も、新系図の中の文亀四年本の流れを汲む。

常盤井和子氏によると、[11]古系図の内容の構成は、①序文、②系譜、③不入系図、⑤有歌無名輩、⑤付載事項に分けられる。①は源氏物語の由来、いわゆる「源氏のおこり」が書かれる。これは⑤に含まれることもある。②は、『源氏物語』の登場人物を家系ごとに記した部分である。皇族の系譜から大臣家、殿上人、受領の順に掲載される。それぞれの人物には、「その人物の母系と、経歴、性質、逸話など」をまとめた「伝」が記される。伝の長さはその人物の重要性によって異なる。③は、登場人物のうち系譜の分からない人物を列挙した部分を指す。これはほぼ全ての伝本に存在するという。名称は伝本によりばらつきがある。④は、「歌の作者であるがその名がつまびらかでない人々を挙げた」箇所であるという。⑤もまた、内容が伝本によって異なる。常盤井氏は一例として、「源氏物語のおこり」「巻名目録」「和歌目録」「源氏としのはてに……（衣配り）」「人のかたちを花に……（容姿）」「きぬの色を……（衣色目）」「居所」「歌数」「和歌作者」「源氏説法」などを挙げている。そのうち最も普及しているのが「源氏物語のおこり」であるという。

系図の作成意図については、ひとつには源氏物語を読むための手引きのような役割のため、もうひとつには「物語の研究的受容」、言い換えれば物語注釈であると言える。ここで特に注目したいのが、皇族から諸大夫に至るまで、人物を家系ごとに系譜によって配列し、その後に系譜不明の人物を列挙するという点である。つまり、系図の後に人物を列挙するという体裁をとっているということになる。

また、⑤付載事項のうち、「人々のかたちを花に……」は『平家花揃』の「花揃」の発想に通ずるものがある。しかし、これだけでは『源氏物語系図』と直接影響関係があったとは言い切れない。例えば九条本では、それは裏書にあり、花に喩える場面の他に女君に合う布の襲を言う場面などが、その人物ごとにまとまって抜書されているのである。他に「人々のかたちを花に……」を付載事項として持つ伝本では、系譜の後に付けられている。つまり、系図の「伝」に書かれているわけではなく、系図とは別に記されているのである。しかし少なくとも、人を花に喩えるという、いわば人物論の一種と物語系図とには親和性があるということは言えるだろう。

次に、宮内庁書陵部蔵『平家物語系図』について考察を行う。『平家物語』の物語系図として知られるものは、物語の普及した範囲の広

さに比べるとほとんど見当たらない。宮内庁書陵部に所蔵されている九条家旧蔵本（以下、九条家本）も伏見宮旧蔵家本（以下、伏見宮家本）もいずれも巻子装で、『平家物語』に登場する皇族、貴族、源氏、平氏を中心に複数の系譜が掲載され、そこに簡単な注記が付されるといった体裁をとる。なお、武士名部のような、系譜に入らない人物についての記述はない。九条家本の二本については、一つは南北朝～室町期写、もう一つは室町～近世初期写と見られる[12]。後者は前者の写しと見られるが「三河のかみのりより」を欠く。伏見宮家本は、九条家本よりも貴族の系譜の掲載数が少ない。なお、九条家旧蔵本の二本、伏見宮家旧蔵本一本は形態上の特徴はほぼ同じであるので、まとめて比較の対象とする。

系図の作成の意図については、人物の呼称や系譜が『平家物語』の記述を元に作成されたと考えられることから、『平家物語』を読むための手引きとするためだと考える。形態の特徴については、まず、巻子装であることや内題が書かれていないことなどが挙げられる。次に、平氏のみならず、『平家物語』前後の時代の皇族、貴族、源氏の系譜が記され、その人物の横に生母や物語に関する注記を仮名書きで記してあるという点が特徴的であると言える。

ここで、『平家花揃』の形態上の特徴と照らし合わせてみると、まず言えるのが、『平家花揃』は、源氏物語系図の形式に類似しているということである。すなわち、系図形式である花揃部の後に侍や武士が列挙されるという形式である。なお、『狭衣系図』の形式も同様であり、この形式が物語系図の形式であると広く認識されていたのではないかと推察される。

ただし、『平家花揃』を物語系図として考えると、花揃部のメインである、人物を花に喩えるといった内容が、物語系図としては異質であるということが指摘できる。なぜなら、系図中に記される注記は物語に沿った内容が普通であるはずなのに、『平家花揃』は物語から離れた内容が書かれることがほとんどであり、これを読んでも『平家物語』を読むための手引きにはならないからである。仮に『平家物語』に登場する人物を論評するという類の『平家物語』注釈であったとしても、それが系図形式である必然性はないとも言える。

つまり、系図系『平家花揃』を物語系図と捉えると、形式上は源氏物語系図に類似していると言えるが、内容面を見ると物語の手引きとして作成されたとは考えにくく、物語系図としては異質であると言わざるを得ないのである。

三　『平家花揃』成立過程の仮説

系図という形式と「花揃」という内容の異質性は、なぜ生じたのであろうか。それは、『平家花揃』の原初態が系図形式ではなく散文体の作品だったことに由来するためではないかと考える。

成立過程の考察は、すでに渥美かをる氏によって行われている[13]。渥美氏は、人物の配列に一貫した基準が認められるものを原初態に近いものであるとし、形式の異なるA・K・Lの三本を考察したところA

を最古態であると結論付け、原初本もAと同じか若干人数が少ないものではないかと推察した。そして、『平家花揃』は系図形式のものが主流であり、草子形式は便宜的な様式に過ぎず、絵本形式はある程度後になってから作られたものと述べている。

しかし、前述したが、これは一部の伝本のみの考察であるため、未だ考察の余地があると言えよう。また、形式についての先後関係を述べているにもかかわらず、その形式については配列ほどに考察されていないと言える。

そこで、先ほどまでの考察で導き出された「系図という形式と『花揃』という内容の異質性」という性質を踏まえ、『平家花揃』の成立過程を考えると、以下のような仮説が立てられる。すなわち、『平家花揃』は、「花づくしの系譜を承けて、物語人物論の要求にこたえ、物合の形式の影響を蒙って生まれた」[14]散文体の作品である原「花揃」に、ある時点で源氏物語系図の形式が組み込まれ、それが現存系図系諸本の元となったのではないかと考える。なお、武士名部は、源氏物語系図の形式の影響を受けたものと考えられるため、物語系図の形式が原「花揃」に組み込まれた時点で増補されたものと考える。系譜に入らない武士や侍が、付載事項として清盛一門の系図の後ろに付けられたのであろう。

なお、現存する非系図系諸本の草子形式の伝本は、散文体である原「花揃」と直接関係のあるものではなく、系図系諸本の抜書的存在であると推察される[15]。Kでは、注を施した神戸良政が、系図系諸本では花に喩えられず、単に系図の始点の役割を果たしている人物について、「是は花によそへたる人にはあらす。其ゆかりをしらんかためなるへし」（忠盛）、「此安芸守基盛朝臣を爰にしるす事、花にたとふるにはあらす。行盛朝臣の父なる故也」（基盛）と書いてあることから[16]、親本も系図形式のものからの抜書的本文を有していたということが分かる。Jは、親本の段階で既に抜書的本文であったか、あるいはJの書写者が系図形式の本文を抜書したのかはここでは分からない。少なくとも、本文や人物配列ではJはKと近い関係にあるため、顕原本が参看した抜書的本文を写した可能性があるということは言える。

原「花揃」から現存諸本までの成立過程を図示すると、図一のようになる。渥美氏が推察した原初態は、原「花揃」に物語系図の形式が組み込まれた形であると考えられる。

では、なぜ散文体の『花揃』に物語系図が組み込まれたと推測し、物語系図に注記として「花揃」が書かれたとは考えないか。ここでは、それについて本文の構成から述べていく。なお、具体的な本文の考察にはAの本文を用い、適宜他の諸本で補うこととする。

『平家花揃』の本文構成は、①目録、②花揃部、③武士名部に分けられるということは先に述べた。①や③が伝本ごとに有無の違いがあるということも、前述した通りである。裏を返せば、どの伝本にも②は存在するということである。内容面においても、②はこの作品の核をなしていると言えるだろう。②は、さらに（一）清盛一門と（二）平氏周辺の貴族・女房に分けられ、そのうち系図で記される

のが（一）の部分であり、（二）は散文体で書かれる。（三）は全ての人物に和歌が添えられるが、（一）で挙げられている人物全てに和歌が付されているわけではない。また、文の長短も人物ごとにばらつきがある。単に長さが異なるというだけでなく、その内容の性質、いわば構成要素が大きく異なっているのである。そこで、人物ごとにその記述の構成要素のばらつきを比較すると、次頁に挙げた表二のようになる。[17]

表の内容の検討に入る前に、この文の構成要素について述べる。ここでは、人物に付される略伝を便宜的に次のように分けた。

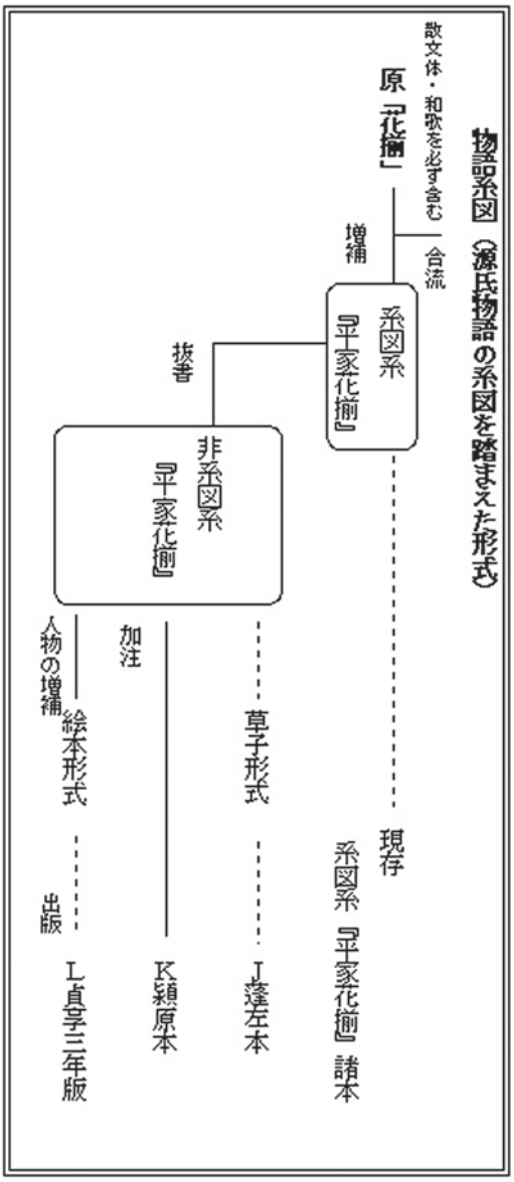
（a）その人物の属性
（b）人物称賛
（c）その人物を景色に喩える
（d）その人物を花に喩える
（e）和歌

（a）はその人物の血縁関係や婚姻関係、官位など、その人物がどのような人物であるかを記した部分であり、[18]例えば「人のやうしになり給ひしとなん」（「土佐守」）などのように記される。

（b）は、「これこそ又きやしやなる人にて物したまへ」（「ゑちせん三位みちもり」）といったような、その人物を称賛する言葉が書かれる。『平家花揃』では、ほぼ全ての人物が称賛される傾向にあるが、一見誰にでも当てはまるような評価が書かれる場合が多い。

（c）は、人物を景色に喩えた部分である。「なにはのうらの秋のくれ、もしほのけふりたちそひてきりわたれるみきはのあしうちなひくけしきとや」（「薩摩守忠教」）というよ

図一　『平家花揃』成立過程仮説



表二　『平家花揃』注記の構成要素一覧

	人物名	(a)属性	(b)称賛	(c)景色	(d)花	(e)和歌
1	平忠盛朝臣					
2	入道大相国　清盛				○	
3	池大納言頼盛		○	○	○	○
4	門わきの中納言教盛		○	○	○	○
5	修理大夫経盛		○	○	○	○
6	薩摩守忠教		○	○	○	○
7	をはりのかみきよさた				○	
8	あはちのかみきよふさ				○	
9	皇后宮亮つね正		○	○		
10	わかさのかみつねとし				○	
11	大夫あつもり	○	○	○	○	
12	ゑちせん三位みちもり		○	○	○	○
13	能登守のりつね		○	○	○	
14	蔵人大夫なり盛				○	
15	中納言りつしちうくわい				○	
16	丹波少将上					
17	小松殿内大臣左大将　しけ盛		○	○	○	○
18	二男大納言右大将　宗盛		○	○	○	
19	新中納言とも盛	○	○	○	○	○
20	本三位中将しけひら		○	○	○	
21	三川守知教				○	
22	きやうの君基盛	○				
23	左馬頭行盛				○	
24	建礼門院　御母二位殿		○		○	
25	准三宮	○			○	
26	七条修理大夫北方		○		○	
27	花山院殿上				○	

	人物名	(a)属性	(b)称賛	(c)景色	(d)花	(e)和歌
28	たか房の北方				○	
29	近衛殿の北政所		○	○	○	
30	らうの御かた				○	
31	後白川院の女御				○	
32	むさしの守知明		○		○	
33	伊賀大夫知忠				○	
34	三位中将維盛		○	○	○	○
35	新三位中将資盛		○	○	○	○
36	左中将清経		○	○	○	○
37	少将有盛		○	○	○	○
38	丹後侍従忠房				○	
39	備中守もろ盛				○	
40	土佐守	○			○	
41	六代　御母新大納言女		○	○	○	
42	ひめ君				○	
43	右衛門督清宗		○		○	
44	ふくしやうくん		○		○	
45	平大納言時忠		○	○	○	○
46	新大納言なり親		○	○	○	○
47	少将たかふさ	○	○	○	○	○
48	小督殿		○	○	○	○
49	土御門大納言国綱女しけひらのうへ	○	○	○	○	○
50	そちの大納言あき明の女時忠の上		○	○	○	○
51	上西門院小宰相殿		○	○	○	○
52	くないのせうこれまさの女	○	○	○	○	○
53	小侍従	○	○	○	○	○

＊人名・配列はA慶大本に拠った。

うに、その景色は庭園の景色が多く、[19]それも時間帯や天候なども含む、具体的な状況についても描かれる。

（d）は（c）の中で記される場合と、「せんのほけ」（「おはりのかみきよさた」）のように、単独で記される場合とがある。

（e）の和歌は、喩えられた花や風景にちなんで詠まれる。先に例として挙げた忠度は、「なにはかたあしのかりねの一夜にも心とまるふしはあるらし」となる。[20]

なお、（a）から（e）まではおおむねこの順に記されるが、順番が前後するものや、他の要素と区別できない形のものもいくつかある。[21]

では、以上を踏まえ、この表の検討を行う。まず一見して、人物ごとに文の要素のばらつきがあることが分かる。そして、これらの要素は互いに関係し合っており、その有無が他の要素の有無に依拠しているものが認められる。まず言えることは、（d）のみというものはあるが（c）のみというものはなく、（c）があれば必ず（d）もある、ということである。その内容を見ると、前述したが、（d）のみのものは花の名をただ一言付けるだけなのに対し、（c）とセットになっている（d）は景色と一体になっているのである。つまり、一口に花に喩えると言っても、その喩えられる内容そのものが大きく異なるのである。

次に目に付くのが、（e）がある文には必ず（b）（c）（d）が揃っている、ということである。とはいえ、（c）とセットの（d）には必ず（e）が付くということは言えないが、ここに該当する人物は少ない。あるいは、現在の目録ナシの系図系諸本にある和歌の誤脱のように、伝来の過程で和歌が抜け落ちてしまったとも考えることができるが憶測に過ぎない。

この構成要素のばらつきは何によるのだろうか。それは、『平家花揃』の成立過程によるものであると考える。すなわち、「花揃」の記述の本来的な形は（b）から（e）まで揃っているものであり、それ以外のものは後補であると推察する。ただし、記述のみが後補であるのではなく、人物そのものが後補であると考える。つまり、現在の『平家花揃』に掲載される人物全てが原「花揃」に載せられていたのではなく、この和歌のある二十名のみが載せられていたのではないだろうか。ある時点で、そこに物語系図が組み込まれ、原「花揃」で書かれた人物が系図形式で表される。すると、系図にすることによって、原「花揃」にはなかった人物が生じる。現在の形にあってもなお人物名しか書かれない平忠盛や、「丹波少将上」（教盛の娘）などにそれが表れている。それらの人物に（d）を増補していったのではないかと推察する。[22]

最後出本であるとされるLの独自記事には、他の諸本では名のみが記されている丹波少将上と基盛に花の名のみの増補がある。このことは、和歌よりも花の名や人物に関する記述の方が増補しやすいということを示しているのではないだろうか。そして、この基盛や丹波少将上にLで行われたことと同じように、系図形式にすることによって表

れた人物に（d）を増補していったのではないだろうか。和歌の方を増補したのではなく、花の名や文のみを増補したと考えるのは、このLの例のためである。

そもそも、「花揃」という発想と共通する作品として挙げられる『堤中納言物語』の「はなだの女御」や『四十二のものあらそひ』、また文の構成が酷似していると指摘される『歌仙落書』、『続歌仙落書』には[23]、全ての人物に和歌が詠まれている。また、源氏物語系図に抜書される、女君を花に喩える場面についても、「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地ぞす[24]」（「野分」）といったように、花にのみ喩えるのではなく、景色の中の花に喩えている。つまり、これらを『平家花揃』と同趣向の作品と捉えると、人物を花のみに喩えるということの方が異質であると言わざるを得ない。そしてそれらには、花が描かれた景色のみならず、和歌が付されることが多いのである。このことは、（d）のみの人物が原「花揃」には無かったということの傍証となるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『平家花揃』現存諸本を形態上の特徴から分類した上で、そこから、『平家花揃』の系図系諸本が『平家物語』注釈として享受された可能性を示した。それを踏まえ、『平家花揃』を物語系図として捉えると、源氏物語系図の形式に類似した物語系図の性質を持つと言えること、その一方で、『平家花揃』の「花揃」という内容そのものが『平家花揃』を物語系図として異質なものにしているということを指摘した。その原因として、『平家花揃』の原初態が系図形式でなかったためと推測し、そこから、散文体である原「花揃」に物語系図の形式が組み込まれたという成立過程の仮説を示した。そのように考える根拠として、人物についての記述の構成要素のばらつきに着目し、原「花揃」は和歌のある人物のみが載せられていたものであり、それが系図形式になった後、他の人物が増補されていき、現在の形となったのではないかと推察した。

今回は具体的な成立圏、作者像については言及することができなかったが[25]、これについては本稿での成果をもとに、今後検討を重ねたい。

注（1）以下、本文の引用は、断りのない限り、松尾葦江「付　慶應義塾図書館蔵『平家花ぞろへ』翻刻ならびに校異」（松尾葦江『平家物語論究』一九八五年三月、明治書院）に拠る。

（2）『平家物語大事典』（二〇一〇年十一月、東京書籍）では、「『平家物語』関連お伽草子一覧」の中に含まれている。

（3）渥美かをる「『平家花揃』伝本考」（『説林』一三号、一九六四年十二月）

（4）松尾葦江「『平家人物論』の基礎的研究」（松尾葦江『平家物語論究』一九八五年三月、明治書院）

（5）吉崎奈々「『平家花揃』の成立年代について―仙翁花と『源氏物語系図』を中心に―」（『武庫川国文』六四号、二〇〇四年十一月）

（6）「花揃部」、「武士名部」の呼称については、松尾葦江氏前掲論文に従った。

（7）「系図形式」、「草子形式」、「絵本形式」の呼称は松尾氏前掲論文による。

（8）うち一本は松尾氏未見。二本は先行研究未出。
（9）後藤丹治「『平家花揃』といふ書に就いて」（後藤丹治『中世国文学研究』一九四三年五月、磯部甲陽堂）
（10）この系図については、田代圭一氏にご教示頂いた。
（11）常磐井和子『源氏物語古系図の研究』（一九七三年三月、笠間書院）
（12）宮内庁書陵部目録にはいずれも室町写とあるが、佐々木孝浩氏のご教示より、前者を南北朝写、後者を近世初期写とした。
（13）渥美かをる「『平家花揃』伝本考」（『説林』一三号、一九六四年十二月）
（14）松尾氏前掲論文。
（15）蓬左本、穎原本冒頭に置かれる平忠盛は、花や文などが書かれず名のみ記されるという不自然な状態である。これは、系図の始点として置かれる系図系諸本の抜書きを参看した形跡であると考えられる。
（16）榊原千鶴「翻刻　京都大学穎原文庫蔵『平家花揃』」（『名古屋大学国語国文学』七九号、一九九六年十二月）
（17）この配列順・人物名は、松尾氏の校異に拠った。
（18）人物名の下に小さく付される場合もあるが、この部分は諸本により異同が激しいため対象から外した。
（19）松尾氏前掲論文によると、ここで喩えられる花は『尺素往来』の「庭上之景荘厳前栽」と一致するという。
（20）傍線は引用者による。
（21）例えば、「能登守のりつね」の「はちすの花の、つゆきら〳〵とたまのやうにをきわたして、水よりいてたる心ちし給ふ。ならひもなくかうなる名とり給へる御人は、王城一のつよゆみせいひやうときこゆ」というような記述が該当する。ここでは、（a）が伝の末尾に置かれる代わりに、（d）が冒頭に挙げられる形になっている。
（22）武士名部もこの時点で増補されたものと推測する。
（23）松尾氏前掲論文。
（24）引用は阿部秋生他校注・訳『源氏物語　三』（一九九六年一月、小学館）による。
（25）作者について、渥美氏は、「平素和歌をたしなみ、題詠になれているか、あるいは付合に訓練された連歌師ではないか」と推察し、また、「源氏物語を愛読したに相違なく、（中略）もともと物語中の人物を花に喩えようとする意図そのものが、源氏物語の人物名から示唆を得たとも考えられる。十五世紀頃の歌人連歌師が、源氏物語を愛読したことも思い合わされる」（渥美氏前掲書）と述べている。

（付記）本稿は、二〇一三年十一月に行われた「早稲田大学国語教育学会　第七回学生会員研究発表会」での発表を元に執筆いたしました。その際、ご教示頂いた方々に御礼申し上げます。